

御家流白露結集

全

御家流白露結集 全

伊与田宗茂勝由録 細谷松男校 一冊 原本
東北大学附属図書館 狩野文庫蔵

〔凡例〕

- ① 句読点、「」、送り仮名等は適宜追記しました。
- ② 旧仮名使いを新仮名使いに適宜改めました。
- ③ 黒字の（ ）は、本文内に小文字で記された注記です。
- ④ 青字の（ ）は、筆者の補足です。
- ⑤ 赤字は、判読等に曖昧な点がある部分です。

白露序

それ物と結事、やくふりたり。結髪(あげしぐし)たまいし

し、唐土の書に結ぶるもの見えし始めにて、唐土

には鳥の後なき。古は繩を結びて書契とせしなり。

花むすびの事、女童のたわむれに似たりといえども

公家に用い給い神器、装束、武具にいたるまで、各

其のむすびありありて、重宝を収め、飲食を■に

奴婢のたやすく開く事あたわざるの為となり。

繩を結びて印とせし遺意なきにしもあらずや。

親と結ひし事とせし遺意なきにしもあらずや

白露序

それ、物を結ぶ事、やくふりたり。結髪(あげしぐし)たまいし

は、■の書に結ぶるもの見えし始めにて、唐土

には鳥の後なき。古は繩を結びて書契とせしなり。

花むすびの事、女童のたわむれに似たりといえども

公家に用い給い神器、装束、武具にいたるまで、各

其のむすびありありて、重宝を収め、飲食を■に

奴婢のたやすく開く事あたわざるの為となり。

繩を結びて印とせし遺意なきにしもあらずや。

香草の雅人も是れを用ゆ。いとやんごとなき故ありとぞ。
 大口先生に此の事口授して、そのわすれんことを
 うれい、形を図し、結び様、文になして此の書なりぬ。
 「白露」と名付くる事は「秋萩のすすき朝なく(朝な)花の
 まいもに結ぶ白露」という古歌の心をなんとれ

享保十五壬子歲二月 涵青灣沍叟四川自序

(夫木和歌抄 430 藤原基家)

目録

夏	結	陽	草	結	陰
梅	結	春	桜	結	春
萩	結	夏	葵	結	夏
桔梗	結	夏	葛	結	秋
菊	結	秋	楓	結	秋
雁	結	秋	蜻蛉	結	秋
舞鶴	結	冬	雪笹	結	冬



目録

真の結び	陽	草の結び	陰
梅結び	春	桜結び	春
蝉結び	夏	葵結び	夏
桔梗結び	夏	葛結び	秋
菊結び	秋	楓結び	秋
雁(雁金)結び	秋	蜻蛉結び	秋
舞鶴結び	冬	雪笹結び	冬

以下 雑

新結

虫相結

八ッ結

兔結

小蝶結

酸漿結

蔓柏結

花鬘結

兎結 俵トモ云

海葵結

孔雀結

揚羽蝶結

龜結

劍酸漿結

あわび結 濱鷗トモ

総角結

叶結

石畳結

以上三十二

真花結

三十二の外

蝶鳥

廿四品

燕子花

小斗庵 追加

五葉牡丹

小斗庵 五判

重叶

寿結び

翁結び

八つ結び

兎結び

小蝶(胡蝶)結び

酸漿(かたばみ)結び

蔓柏(つたがしわ)結び

花鬘(けまん || 華鬘)結び

兎結び(俵とも云う)

輪貫(わぬき)結び

孔雀結び

揚羽蝶結び

龜結び

劍酸漿結び

あわび結び(濱鷗とも)

総角(あげまき)結び

叶(かのう)結び

石畳結び

以上三十二

真花結び 三十二の外

蝶鳥

此の四品

燕子花(かきつばた)

小斗庵 追加

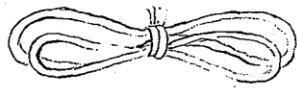
五葉牡丹

小斗庵 在判

重叶

真結

初一筋して左太揃て左の指より、
 尾の筋一筋をたわめて、右の方の
 緒を向こうに廻し、左のたわめたる間に
 くぐらせて、左右へ引きしめる。両方の
 はしの糸を乱れざるように
 して置く。引き解くには左右へ引き
 そぐなり。



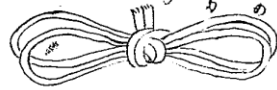
真結び

初め一結びして左右持って左の指にて
 左の方へ一筋をたわめて、右の方の
 緒を向こうに廻し、左のたわめたる間に
 くぐらせて、左右へ引きしめる。両方の
 はしの糸を乱れざるように
 して置く。引き解くには左右へ引き
 そぐなり。

[図]

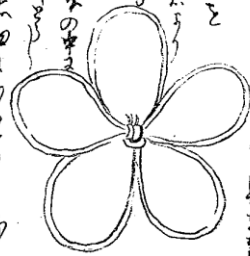
五葉 織

一 結して左の指にてたわめ
 緒と左の指にてたわめ
 伏せて向の緒と左の指
 引き廻し、たわめたる
 わなに入れ通し、引きしめ
 ながら向こうの方に
 打ちかえすなり。その時に
 筋違いすなおにして
 左右に引けば解くるなり。



新 織

一 結して向の指にてたわめ
 緒と左の指にてたわめ
 伏せて向の緒と左の指
 引き廻し、たわめたる
 わなに入れ通し、引きしめ
 ながら向こうの方に
 打ちかえすなり。その時に
 筋違いすなおにして
 左右に引けば解くるなり。



草結び

一 結びして左右揃え、前方の
 緒を左の指にてたわめ
 伏せて向こうの緒を前の方
 引き廻し、たわめたる
 わなに入れ通し、引きしめ
 ながら向こうの方に
 打ちかえすなり。その時に
 筋違いすなおにして
 左右に引けば解くるなり。

〔図〕

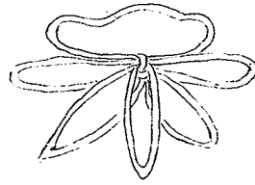
梅結び

一 結びして向こうを五分ばか
 り残り
 置き、わなにして長き方の
 緒を
 左右より
 五分
 の
 わなの中に
 引きとおし
 左右四方になるなり。残り一
 つ有る
 を向こうへ打ち返すと五の花
 べ(び)らと
 なり、五分のわなをしめて、五
 つ
 同様に引き揃え、花の形にな
 る。

〔図〕

雪笹結

初一結し向ふと四ケ一(四分の一)残すなり
 是よりまた一結し桔梗
 同しゆ柄の如く恰好
 好



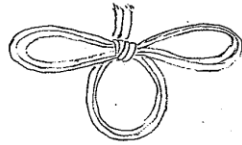
雪笹結び

初め一結びして向こうを四ケ一(四分の一)残すなり
 是よりまた一結びして「桔梗」と
 同じ。さて、揃え様、図の如く恰好
 すべし。

〔図〕

一乃う後結

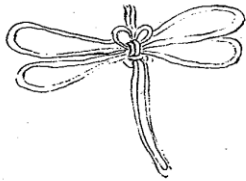
一結してくちかきと大丸輪にして
 花の人指と大指とのよよ白のものを
 緒上へならべ、左の大指にておさきへ
 右の手に残る緒を左の人指と大指の
 間に挟み、先にのせ置きたる緒を右の方へ
 引くと笹になるなり。引き解くには、中の輪を
 引かすると解くるなり。



[図]

蜻蛉結

緒引きのはし、巻筋を五分の輪なにして
 其のはなに二筋揃えて通し、七分ばかりのわな
 にす。その輪な左右より通す。則ち、羽つがい
 四枚になるなり。残りたる緒を向こうへ打ち返し
 前に二筋揃えて残りたる七分の糸の下へ
 引き通し、目になるなり。その脇残りを手前へ引き
 是は「どんぼ」を(の)尻尾になるなり。解く時は
 目を引くなり。



[図]

蜻蛉結び

一結びして、くるりと大丸輪にして
 左の人指(人差指)と大指(親指)との上に向こうの方の
 緒上へならべ、左の大指にておさきへ
 右の手に残る緒を左の人指と大指の
 間に挟み、先にのせ置きたる緒を右の方へ
 引くと笹になるなり。引き解くには、中の輪を
 引かすると解くるなり。

封結

一 紐しを向こう四割一ツ残し、手前三つばかり右の方角に引き分けかけ、向こうの四ヶ一残る糸の下に手前かけたる本あり、其の本を人指と大指にてつまみ、前より引く

拍子に手首に成りたるを

向こう行き、



三つ分の緒、二重になりて封になる。引き解くには上下の留め、両方に引く。

封結び(封じ結び)

一 結びして向こうを四つ割り一つ残し、手前三つばかり右の方角に引き分けかけ、向こうの四ヶ一残る糸の下に手前かけたる本あり。其の本を人指と大指にてつまみ、前より引く

拍子に手首に成りたるを

[図]

向こう行き、「くつ」と引けば

楓結

是は、「菊」を打ち返したるものなり。



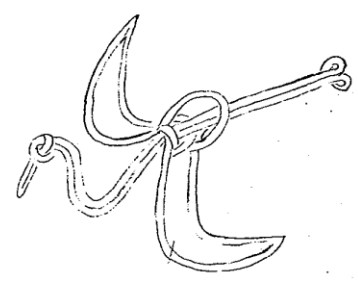
楓結び

是は、「菊」を打ち返したるものなり。

[図]

舞鶴結

糸配り「梅」とおなじ



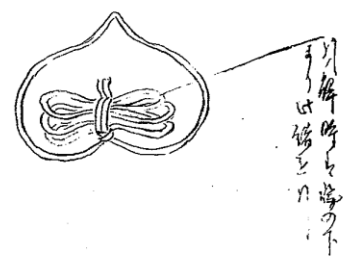
舞鶴結び

糸配り「梅」とおなじ。

[図]

葵結

初め一結びして向こうより三つ割り
二つぶん残し出して此の向こうの緒を
「真の結び」におすび、前の輪を
向こうにやり、惣躰恰好なるなり。



引解く時は、輪の下より此の緒を引く

葵結び

初め一結びして向こうより三つ割り
二つぶん残し出し、此の向こうの緒を
「真の結び」におすび、前の輪を
向こうにやり、惣躰恰好するなり。

[図]

← 引き解く時は、輪の下より此の緒を引く

桔梗結

車紙 柄よおな



桔梗

糸配り「梅」におなじ。

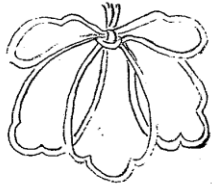
☒

葛結

桔梗と同率よの花印と

下はさげてかつまよを全

柄よ糸配りおなじ



葛結び

「桔梗」に同じ事。上の花びらを

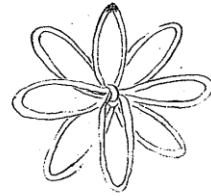
下にさげてかつま(恰好)すべし。

「梅」と糸配りおなじ。

☒

菊結

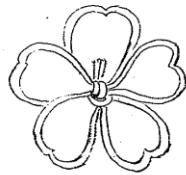
桔梗と同じ事。尤も両方より
通し候。さてまず、左の方一度通し。
さて、右を通し、再度通し。
合わせ恰好するなり。



[図]

梅結

結方系配 梅と同じ
花べ(び)ら、先の方きめこむと
「桜」の花形に成るなり。



[図]

菊結び

「桔梗」に同じ事。尤も両方より
通し候。さてまず、左の方一度通し。
さて、右を通し、再度通し。
合わせ恰好するなり。

[図]

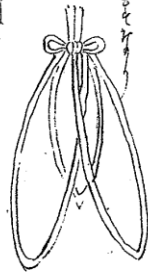
桜結び

結方、系配「梅」と同じ
花べ(び)ら、先の方きめこむと
「桜」の花形に成るなり。

[図]

蝉結

緒長く引伸ばし、左の人指にくるくると向こうへ二遍巻きて
わなにして、長く残る緒を左右よりわなに通す
なり。此の時、羽は上になる様に通すなり。
その糸配りなり。
通したる糸は、蟬の身になるなり。
羽がい(羽交)の中の緒を引きしめるとめ(目)に
なるなり。解くときは身の糸を引くなり。



解く時は、身の糸を引くなり。

児結び

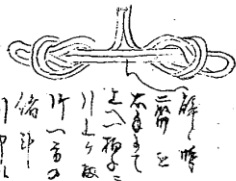
初め一結びして両方揃え、二筋を輪にとりて、前の方に横に置
く。

二筋ずつ輪を左右の人指と中指を上より下へ差通し、先の方
両手をつき出し、■は両手とも仰むけになり申し候。さて、
両手を両方より真ん中へ伏せ、両二指を
からめ、左右とも二指の間へ中の紐を横に
両方引き出し申し候時、大指を抜き、三指にて両方
引き分け候程に、かる(軽)くし(締)め申し候。

[図] 解く時、二筋を右手にて上へ一拍子に引き上げ、
さて、■一方の緒ばかり引き申し候。

児結

第一結して両方揃え、二筋を輪にとりて、前の方に横に置
く。二筋を輪を左右の人指と中指を上より下へ差通し、先の方
両手をつき出し、■は両手とも仰むけになり申し候。さて、
両手を両方より真ん中へ伏せ、両二指を
からめ、左右とも二指の間へ中の紐を横に
両方引き出し申し候時、大指を抜き、三指にて両方
引き分け候程に、かる(軽)くし(締)め申し候。



解く時、
二筋を
上より
引上げ
て、
一方の
緒を
引く。


二股結

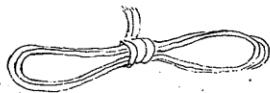
初め一結びを両方等分にして右の手に持ち、左の手にて緒を中より二つに打ち分け、右の手にて上の輪の内より下の輪を持ち、さて、左の手にて右に持ち居え候。緒を上より持ち、少し差しときあけ、さて、左の手を打ち返し、右の手にて緒の内より左の手に持ち居える。緒を持ち左右へ引きしむるなり。地緒は筆頭に残し置くといえども解きがたし。口傳なしでは結び得がたし。



輪貫結

三かかり

真の結びをして左右とも巻筋の方へ手前の二筋を両方とも通して、引きしめれば、この如く「」結び目三つになるなり。左右へ引く緒は四筋なり。解くには中の結び目、上下両手にて引き解くなり。



翁結び


初め一結びして両方等分にして右の手に持ち、左の手にて緒を中より二つに打ち分け、右の手にて上の輪の内より下の輪を持ち、さて、左の手にて右に持ち居え候。緒を上より持ち、少し

[図]

差しときあけ、さて、左の手を打ち返し、右の手にて緒の内より左の手に持ち居える。緒を持ち左右へ引きしむるなり。地緒は筆頭に残し置くといえども解きがたし。口傳なしでは結び得がたし。

輪貫結び

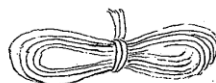
三かかり

真の結びをして左右とも巻筋の方へ手前の二筋を両方とも通して、引きしめれば、この如く「」結び目三つになるなり。左右へ引く緒は四筋なり。解くには中の結び目、上下両手にて引き解くなり。

[図]

ハツ結

ハツ結しては糸の方丈一針り解く。是處の長き方丈の
 四筋は左方四筋、尾を三筋留め、ゆづり合ひ、ひとしくして海
 置きたる糸をくるりと引き廻し結びて
 尾の方中、尾を四筋にゆづり合ひ、ひとしくして海
 置きたる糸を解く。糸と上の
 糸とくや



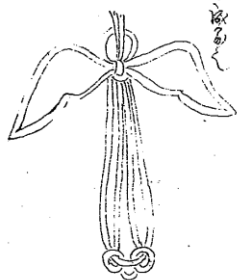
ハツ結び

一結びして、手前の方少しばかり残り置き、向こうの長き方、
 右の方
 四筋、左方四筋、左方三筋にゆづり合ひ、ひとしくして残り
 置きたる糸をくるりと引き廻し結びて
 左の方中すみ、左も四筋になりて、左右
 にてハツに成る。解くは、締め糸を上から
 ほどくなり。

〔図〕

孔雀結

一結びして、残の方五方程の口を成、為結す。孔雀の首く
 玉くくりの形なり。其の長き方にて五分程のわなを拵えて
 尾へ尾太より緒を入、両羽と胴と尾を結びて、胴の
 尾と引通し、先は宝珠三つに成るなり。
 引解ハ尾太より引く



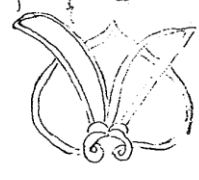
孔雀結び

一結びして残りの方、五分程のわなを留緒にかける。孔雀の首
 玉くくりの形なり。其の後、長き方にて五分程のわなを拵えて
 それへ左右より緒を入れ、両羽と胴と尾を結びて、胴の
 尾を引き通し、先に宝珠三つに成るなり。
 引き解くは、尾前より引くなり。

〔図〕

兔結

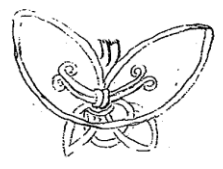
結初めの蟬と同じ。人指へ緒を二度巻き付けて両前へ出でたる長緒を右は左へ、左は右へ筋違い通し候時、四筋輪を二筋ずつ分けて左右の輪へ同じように緒を通して此の通り緒上にて耳になるなり。さて、残したる大輪は、向こうの耳の下へやり胴になし、前にて■き小輪に拵えるなり。是あし(足)なり。解くは胴の尖りを持ちて引くなり。



[図]

揚羽蝶結

初め一結びして向こうの方を三つ一(三分の一)分を残し置き、前の緒にてまた一結びして、「梅結び」にして図の如く格好して、一は初め向こうに残し置きし緒を前へよ(縫)り図の如く格好にするなり。



[図]

兔結び

結び初めは「蟬」と同じ。人指へ緒を二度巻き付けて両前へ出でたる長緒を右は左へ、左は右へ筋違い通し候時、四筋輪を二筋ずつ分けて左右の輪へ同じように緒を通して此の通り緒上にて耳になるなり。さて、残したる大輪は、向こうの耳の下へやり胴になし、前にて■き小輪に拵えるなり。是あし(足)なり。解くは胴の尖りを持ちて引くなり。

[図]

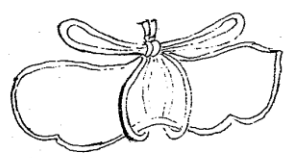
揚羽蝶結び

初め一結びして向こうの方を三つ一(三分の一)分を残し置き、前の緒にてまた一結びして、「梅結び」にして図の如く格好して、一は初め向こうに残し置きし緒を前へよ(縫)り図の如く格好にするなり。

[図]

胡蝶結

梅に糸配りおなじ



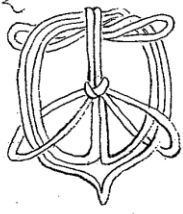
胡蝶結び

「梅」に糸配りおなじ。

[図]

亀結

初一結しこの向の方四ヶ一残し、此の向この緒をまた一
 して置く。此の両輪、後にあし(足)になり申し候。間通し下へ
 分けて置く。さて、前の方、長き緒の真ん中
 尾先と心得覚え置き、両方へ二重に
 とりて初めの足(足)の両輪(図)の
 如く通して、向この打ち留めの下にて
 一結びして、これを前あしに残すなり。
 さて、尾先もようす(様子)ほ(を)、格好するなり。



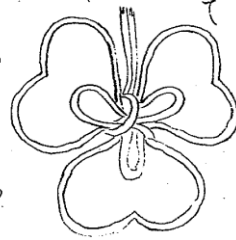
亀結び

初め一結びして向この方四ヶ一残し、此の向この緒をまた一
 結び
 して置く。此の両輪、後にあし(足)になり申し候。間通し下へ
 下げて、左右
 分け置く。さて、前の方、長き緒の真ん中
 尾先と心得覚え置き、両方へ二重に
 とりて初めの足(足)の両輪(図)の
 如く通して、向この打ち留めの下にて
 一結びして、これを前あしに残すなり。
 さて、尾先もようす(様子)ほ(を)、格好するなり。

[図]

酸漿結

初拵梗の如し、右向(五分)一筋、左向(五分)一筋の長き緒と一筋ずつして小輪差して中の小輪と拵糸糸の長き緒一筋して左の方三つ、右の方三つと緒を結ぶ。結とくつ角を右の方の緒と拵糸糸を差して是は左の方の小輪と拵糸糸を拵糸糸の解は右の大輪を引く。



酸漿漿結

酸漿系能會世よわな



酢漿結び

初め「桔梗」の如し。両向こうへ五分の一ほど残し、前の長き緒を一筋とりて小輪差し通して中の小輪を拵うる。糸前の長き緒、一結びして、左の方三つ、一つ残し置き、この一つ分を結びたる中結びをくつ角、右の方の緒を一筋差し通して、是を左右の小輪に拵えるなり。輪にて格好作る。解き候は右の大輪を引くなり。

[図]

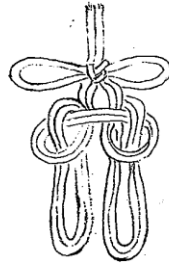
劍酢漿結び

結び様、糸配り、「雪笹」におなじ。

[図]

華蔓結

初一結して向こうを五つ一（五分の一）ほど残し、これを一結び残し置く。
下の長き緒を「児結び」にして、両はしを下の方にたるるなり。解くは「児結び」におなじ。



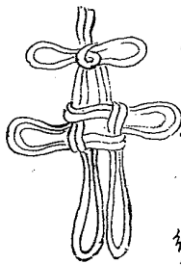
華蔓結び

初め一結びして向こうを五つ一（五分の一）ほど残し、これを一結び残し置く。
下の長き緒を「児結び」にして、両はしを下の方にたるるなり。解くは「児結び」におなじ。

[図]

総角結

始一結して両方等分にして、一筋のあかきに緒を世の常の「とんぼ結び」にするなり。

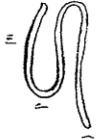


総角結び

始め一結びして、両方等分にして、一筋のあかきに緒を世の常の「とんぼ結び」にするなり。

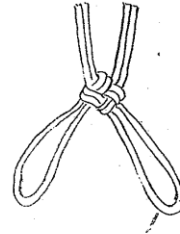
[図]

叶結



一初一結びして左右ひとしく
花のちもあはしの如くニツ

折りしきく持ち据え右の方を
の間へ上の方へ入れ右の方へ引き通し
あはしきのちの上へかきつけ
二と三との間にいれしめる解く時は
引き留めの糸をくりとるなり



叶結び

[図] 初め一結びして左右ひとしく

左の方、糸を上への如く三つ

折りにして持ち据え、右の方、糸を一と二と

の間へ上の方へ入れ、左の方へ引き通し

爰(三)で一の糸の上をくぐらせ

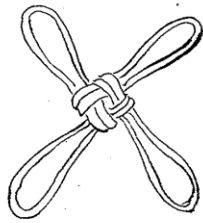
二と三との間に入れ、しめる。解く時は

引き留めの糸をくりとるなり。

[図]

石置結

初一結びして両方等しく
して、それをまた四つにひとしく
して、通しかさねるなり。解くとき
内石置いづれにても一つよりほどく



石置結び

初め一結びして両方等しく

して、それをまた四つにひとしく

して、通しかさねるなり。解くとき

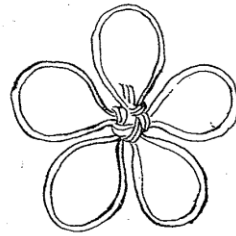
内石置いづれにても一つよりほどく。

[図]

眞の花結

此結者石畳と云ふ

と云ふものなり



眞の花結び

この結びは「石畳」を五つにとりたるものなり。

[図]

白露結書終

白露結書終

昔延享二乙丑歲 初七月 下浣 再正

昔延享二乙丑歲 秋七月 下浣 再正

岩田信安瀨芳父誌

岩田信安瀨芳父誌
(大枝流芳)

于時 寛延三庚午歲 夏四月 念二日 於浪花北斗庵

淳叟謹書

于時 寛延三庚午歲 夏四月 念二日 於浪花北斗庵

淳叟謹書

在判

[在判]

于北斗庵自筆書卷 寫畢 于時 文化九年 壬申 秋七月 廿一日 当流関門 伊藤薰翠齋 辰芳 傳來

右、北斗庵自筆書卷 寫畢 于時 文化九年 壬申 秋七月 廿一日 当流関門 伊藤薰翠齋 辰芳 傳來

右、当流秘事と雖も執心に依り、授傳の畢（おわんぬ）。
猥に他見、他言、許すべからざるものなり。

伊与田宗茂

勝由

細谷助左衛門殿

右、当流秘事と雖も執心に依り、授傳の畢（おわんぬ）。

猥に他見、他言、許すべからざるものなり。

伊与田宗茂

勝由

細谷助左衛門殿

令和五年九月

『香筵雅遊』 國井和裕